



TITLE:

# 造格の機能といわゆる叙述の造格について

AUTHOR(S):

山口, 巖

---

CITATION:

山口, 巖. 造格の機能といわゆる叙述の造格について. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 1998: 328-346

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65816>

RIGHT:

## 造格の機能といわゆる叙述の造格について<sup>1</sup>

### I. 序 言

§1 ロシア文法でいう「造格」は творительный падеж の直訳であり、一般には「具格」instrumentalis と呼ばれている。

この造格の使用は極めて多岐にわたっているが、最も基本的な意義は、道具を示すものであるとされている。しかしこの意義を基本的なものとすれば、この格の有する他の諸機能を必ずしも十分に説明することができない場合が生じる。ここから道具を示すという機能そのものが、より基本的なものから派生した二次的な機能であると考え、この基本的な機能を取りあえず次のように想定した。即ち作業仮説である。

造格は名詞によって示される対象について、その機能乃至は「はたらき」を表示することをもって、自らの機能とする形式である。

§2 いまある具象名詞を考えてみる。これは言語外現実の中のある対象を指示するが、この対象は「自然に」存在していることもあり、また一定の目的をもって人為的に作られたものである可能性もある。後者の場合のみならず前者においても、これらの対象は潜在的に色々な「はたらき」をする可能性をもつ。

上述の仮説は、造格を対象そのものではなく、この対象の有する「はたらき」を指示する形式であると考ええる。しかもその際その「はたらき」の内容乃至質についての一切の制約はないと考えるのである。

もしこの対象が一定の目的をもって人為的に作られたものであるならば、その主要な機能はおのずから定まっている。したがってこの場合には造格がこの主要な機能を指示する蓋然性は極めて高いと考えられるが、逆にその他の、潜在的に可能な「はたらき」を排除するものでは必ずしもない。

### II. 造格の諸機能と基本的意義

§3 上述したことから明かなように、造格の使用は名詞が指示する対象の性質に深く関わっていることになる。これは更に対象の言語的命名の仕方そのものにも、深くかかわっていると、いうことができる。

たとえば карандаш「鉛筆」という語を考えてみる。これは材質としては木材、黒鉛、粘土等から成り立っているが、全体として一定の用に供せられるものとして作られ、かつ命

<sup>1</sup>『人文』第28集 昭和57(1982)年3月 91-116頁。

名されている。このように主要な用途が予め定まっているものについては、「はたらき」の指示は道具を示すことになり易いといえる。たとえば *писать карандашом, пером* 「鉛筆、筆で書く」のような場合である。

しかしこれはあくまでも蓋然性の問題にすぎない。同じ *карандаш* の造格が、たとえば *толкнуть кого карандашом* 「人を鉛筆で突く」のように、別の可能な「はたらき」を指すことも、また可能だからである。

自然に存在するものについては、その有する諸機能の間に主要なものと副次的なものとの区別はない。しかし具象物の場合にはたとえば *бить кого камнем* 「石をもて人を打つ」のように、道具の意義をもつことが多い。

このように道具の意義は、仮説から直接に導くことができる。古代ロシア語において最も広く用いられたのも、またこの意義であった。たとえば、

- 1) *ѿ ка́нѣннѣхъ же всѡвасѣ в ло́жницю всѣхъ [н] съѣ́хше ю́го сѣбѣ ламнѣ и мѣу и́. ндо́ша проу́.* (ПВЛ л.124об. 6683(1175))

「ところで呪われた者共はみな、寝所に押入り、彼(アンドレイ)をサーベルや剣で切り(殺し)、立去った。」

§4 動物をあらわす名詞も、造格が道具の意味をもって使用されることがある。これはその動物の人間に対する役割と関係している。

- 2) *Голосомъ пѣть, а конемъ воевать.* (Пословица)

「うたうのは声によってであるが、戦うのは馬によつてだ。」

人をあらわす名詞でも、その名詞の指す人物よりも何等かの意味で上位にある者に対して、造格に立つて道具の意味に用いられることがある。たとえば、

- 3) *(Т)ы тяже все соудять послоухы свободными.* (Русс. Пр.)

「それらの裁判はすべて、自由な証人達によつて裁かれる。」

- 4) *Многа же чюдеса показа бѣ на мѣстѣ томъ стыма своиа стрѣщема.*  
(Чт. Б. и Г.)

「神はその場所で、聖なるおのれの(二人の)殉教者によつて、多くの奇跡を行いたうた。」

§5 人を指す名詞が造格に立つ場合最も自然なのは、この格が行為者を表わすときであろう。しかし古代語における被動表現についてみれば、行為者をあらわすのに専らこの格

のみが用いられるということはなかった。отъ + 生格による句もこれと同程度の頻度をもって用いられているのである。

отъ + 生格の構文は、本来行為の起源をあらわすものであったと考えられ、即物的な造格よりも、むしろ好まれていたと思われるが、漸次その使用が減少し、やがて現代語にみられるように、完全に造格によって駆逐されるに至る。

造格使用の例としてはたとえば、

- 5) И бѣ любим Борисѣмъ паче меры. (Сказ. о Б. и Г. 11г-12а)

「しかして彼はボリスによつて溺愛されていた。」<sup>2</sup>

- 6) ВЗЯТЬ БЫ КИЕВЪ РЮРКОМЪ И ОЛГОВНУН И ВСЕЮ ПОЛОВЕЦЬСКОЮ ЗЕМ-  
ЛЕЮ. (ПВЛ л.141об. 6711(1203))

「キエフはリューリック、オレグの子等、およびポロヴェツの全土によつて占領された。」<sup>3</sup>

§6 抽象名詞の場合、造格は通常手段を示すとされるが、これも仮説から直接導くことができる。たとえば、

- 7) И НЕ ДОБѢХАВШЕ МСТИСЛАВНУН ПОВЕРГОША СТАГЪ И ПОБѢГОША, ГО-  
НИМН ГНѢВОМЪ БЖЬИМН И СТОЕ БЦН. (ПВЛ л.127 6684(1176))

「しかしてムスチスラフは到着できずに旗を倒し、神と聖母の怒りに追われて逃亡した。」<sup>4</sup>

- 8) ЕГО Ж НЫНѢ ХЪ БЛГЫ И УЛВКЛЮБЕЦЪ СЛОВОМЪ ИЦѢЛН. (К. Тур. с.36)

「彼をキリストはいま、ことばによつて癒されたのである。」<sup>5</sup>

§7 古代ロシア語においては、身体の部分をあらわす名詞も、造格に立って手段をあらわすことがあった。これも名詞の指示する対象の可能な機能をあらわすという意味で、作業仮説から逸脱するものではない。

- 9) ...АЩЕ ЛИ НЕ ВѢРЮЕТЕ, ДА ОУЗРНТЕ СВОИМА ОУНМА. (ПВЛ л.44об. 6505(997))

「もし貴方がたが信じないのなら、自分のふたつの眼でみるがよい。」<sup>6</sup>

<sup>2</sup> АН СССР Сравнительно-исторический синтаксис восточнославянских языков. Члены предложения, М. 1968, p. 259.

<sup>3</sup> op. cit., pp. 256-260.

<sup>4</sup> op. cit., p. 229.

<sup>5</sup> ibid.

<sup>6</sup> op. cit., p. 230.

- 10) І ВНАДѢВШЕ ПОЛОВЦЫ ПОБѢГОША Н НАШН ПО НН<sup>х</sup> ПОГН<sup>а</sup>ША, ѠВЫ СѢ-  
КѢЩЕ, ѠВЫ ЕМЬЛЮЩЕ, Н НАША НХЪ РѢКАМН ПОЛТОРЫ ТЫСЛЮТЪ, А ПРО-  
УНН НЗБНША. (ПВЛ л.121об. 6677(1169))

「これをみてポロフツィは逃げ、我軍は彼等を追った。ある者は斬り、ある者はとらえた。こうして我軍は彼等の 1500 人を手で捕え、残りの者は殺したのである。」<sup>7</sup>

- 11) Таче възърѣвъ къ нимъ оумиленьмъ гласъмъ и измълкъшьмъ грьта-  
ньмъ рече. (Сказ. Б. и Г. л.14г)

「そこで彼は彼等の方に目を挙げ、感動した声としわがれた喉で、言った。」<sup>8</sup>

§8 原因を示す造格として分類されているものの中にも、「はたらき」を表わすと解されるものが多い。たとえば、

- 12) ТАТАРОВЕ ЖЕ СНАДОУ ѠТВОРНША ДВЕРН ЦРКВННЫМЪ Н ВНАДѢША ѠВЫ  
ѠГНѢ СКОУДАВША. (ПВЛ л.161 6745(1237))

「タタール人達は力で教会の扉を開き、ある人々が火によって生命を終えたのを見た。」<sup>9</sup>

- 13) БЛГВНЪ ЮСН БѢ· КАКО ТОВОЮ ПРОНДОХ<sup>м</sup> СКВОЗЪ ѠГНЬ Н ВОДЪ. (ПВЛ  
л.120 6677(1169))

「神よ汝は祝福されてあれ。汝のゆえに我等火と水を通り抜けしが為なり。」<sup>10</sup>

- 14) БЖНМ ЖЕ ЗАСТѢПЛЕНЬЕМЪ Н МАТВОЮ РОДИТЕЛЬ СВОИХЪ, СХРАНЕНЪ  
БЫ БЕЗЪ РАНЫ. (ПВЛ л.111об. 6660(1152))

「ところで神の加護とおのが両親の祈りによって、彼は恙なく護られたのであった。」<sup>11</sup>

§9 以上の例は何れも「外的原因」をあらわすとされているものである<sup>12</sup>。その内部で例 12) は物理的な対象乃至現象をあらわすものに属せしめられ、例 13) は「行為の実現を助ける生ける対象」をあらわすものとして分類されている。例 14) は「行為を惹起する外的条件」をあらわすとされるものである。

<sup>7</sup> op. cit., p. 230.

<sup>8</sup> op. cit., pp. 229–230.

<sup>9</sup> op. cit., p. 252.

<sup>10</sup> ibid.

<sup>11</sup> ibid.

<sup>12</sup> ibid.

例文から明らかなように、これらの造格も「はたらき」をあらわすと解することができる。「原因」の意義は、文脈の中におけるこれらの「はたらき」の解釈の結果生じるものであると考えるのである。

同様にして行為主体の内部に生起する、生理的あるいは心理的過程をあらわす名詞の造格によって示されるところの、いわゆる「内的原因」<sup>13</sup>も、これらの過程のもつ「はたらき」の結果として説明することができる。たとえば、

- 15) ЛЫЖДЪЕ НЗНЕМОГОША ВОДНОМЪ ЖАЖЕШЪ. (ПВЛ л.37об. 6496(988))

「人々は水の渇きによって力を失った。」<sup>14</sup>

- 16) А МЫ НЗНЕМОГАЮ ГЛАДАЮ. (ПВЛ л.91об. 6605(1097))

「ところで我々は飢によって力を失うのである。」<sup>15</sup>

§10 次の例は「外的原因」をあらわすとされるものであるが、これも過程の有する「はたらき」を表わすものと解される。

- 17) и брани многы съ нимъ съставивъ; и въсегда пособиемъ божиемъ и поспѣшениемъ стою побѣдивъ; елико брани състави; (Сказ. о Б. и Г. л.15б-в)

「しかして多くの戦いを彼となしたが、戦いをする度に、神の助けと両聖人の配慮によって、常に勝利したのである。」<sup>16</sup>

「外的原因」をあらわす造格は、やがて *отъ*, *из-за*, *по*, *благодаря* などの前置詞の導く句によって代替されて行く。これは言語の論理化に伴い、文脈による解釈にすぎなかった「原因」の意義が、次第に形式化を蒙った結果であると想像される。

§11 この外「強調の造格」творительный усиленияあるいは「同族的造格」творительный тавтологическийといわれるもの<sup>17</sup>も、名詞の指示する対象の「はたらき」を指示するものとして、説明することができる。

- 18) Уже намъ своихъ милыхъ ладъ ни мыслию смыслити, ни думою сдумати, ни очима съглядати. (Сл. о П. Из. с. 20)

「もはや我々には、自分達の愛しい夫を心によっても考えられず、思いによっても思われず、眼によってもみることができぬ。」<sup>18</sup>

<sup>13</sup> *op. cit.*, p. 251.

<sup>14</sup> *ibid.*

<sup>15</sup> *ibid.*

<sup>16</sup> *op. cit.*, p. 252.

<sup>17</sup> *op. cit.*, p. 246.

<sup>18</sup> *op. cit.*, p. 242.

- 19) ТОТЪ ВО ГРѢСѢХЪ, ДА ВЪДЕТЬ И ѸМРЕТЬ ЗЛОЮ СМЕРТІЮ (Ярл. Берд. 1357г. cf. Срезневский)  
 「その者は罪のうちに、惡しき死をもつて死するであらう。」

例 19) の同族的造格は、過程のもつ「はたらき」の指示として説明できる。事実この種の造格には、過程を示すものが多い。たとえば спать крепким сном 「ぐっすり眠る」、радоваться сокойною радостью 「穏やかな喜びを味わう」、жить полной жизнью 「満ち足りた生涯を送る」、умирать лихой смертью 「不幸な死を逐げる」などがこれに属する。

§12 ロシア文法では、いわゆる「転化の造格」творительный превращения、および「比較の造格」творительный сравнения の区別を立てるか否かに就いて、諸家の見解は一致していない<sup>19</sup>。それにもかかわらず、両者共名詞によって指示される対象の「はたらき」を示すことをその原義とすることには、疑いの余地がないように思われる。

- 20) Уже бо Сула не течеть сребренными струями къ граду Переяславлю, и Двина болотомъ течеть онымъ грознымъ Полочаномъ подь кликомъ поганныхъ. (Сл. о П. Из. с. 33)  
 「スーラははや、しろがねの流れをなして、ペレヤスラヴリの城に流れず、ドヴィナは、異教の民の叫びのもとなる、恐るべきかのポロツクびとのかたに、沼の如くに流れるが故に。」<sup>20</sup>

- 21) Скочи отъ нихъ лютымъ звѣремъ въ пльночи. (Сл. о П. Из. с. 35)  
 「かれは夜もなかつ、猛きけものとなりて (あるいはけものの如く)、彼等のもとより奔りぬ。」<sup>21</sup>

ここにおいても再び「転化」であるか「比較」であるかは、偏に文脈における「はたらき」の解釈に帰せしめるべき問題であつて、造格の機能そのものに関わるものではないと考えられる。この点に関してポテブニヤの所説は、まさに肯綮に当たっていると言うことができる<sup>22</sup>。

<sup>19</sup> Сравнительно-исторический синтаксис..., p. 242; Ф. И. Буслаев, Историческая грамматика русского языка, М. 1968, pp. 471-472; А. А. Потебня, Из записок по русской грамматике, т. 1-2, p. 486; А. М. Пешковский, Русский синтаксис в научном освещении, М. 1956, p. 244.

<sup>20</sup> Сравнительно-исторический синтаксис..., p. 243.

<sup>21</sup> ibid.

<sup>22</sup> Разница между твор. превращения и сравнения неграмматична, т.е. не формальна, а вещественна, а может быть определена в каждом частном случае лишь при помощи обширного круга мыслей, не составляющего грамматической единицы (А. А. Потебня, op. cit., p. 486).

ただここで注意すべきは、このような解釈が、やがて拡張され、造格に立つ名詞の示す対象の「ありよう」乃至は「存在の仕方」をあらわすようになる契機を、そのうちに蔵していると考えられることである。

§13 名詞が空間あるいは時間をあらわす場合、その指示する空間もしくは時間が行為に参与するのは、行為の成立の要件としてでなくてはなるまい。時間と空間を排除したところに、行為は成立し得ないからである。

もし行為の成立そのもののうちに、その成立の条件として暗々裡に合意されている時間と空間を、行為との関連において明示的な形で表示しようとするれば、それはこれらの時間至空間を、その「はたらき」の形で提示する以外にはない。

従ってこの種の造格の使用は、空間乃至時間の行為への参与の仕方が特に顕著であるような動詞において、最も著しい形であらわれると推測される。

まず時間の関与が著しいと考えられるものとしては、過程又は状態の質を有する動詞が考えられる。また空間の参与の著しいと予想されるものには、移動をあらわす動詞がある。この両者に共通するものを考えれば、それは運動(移動)の動詞ということになる。事実この種の造格を伴う動詞は、大部分が運動(移動)の動詞なのである。

§14 時間をあらわす名詞の造格には、行為によって占有される時間をあらわす場合と、造格に立つ名詞のあらわす時間の枠内で行為が行われることを表わす場合とがあると考えられる。

しかしこれとても私見の限りでは、文脈による解釈の問題に帰すると考えられる。

22) и тако идьи трѣми недѣлями доиде прежереченаго. (*Жит. Феод. Печ.* л.31a)

「かくして三週間行き、さきに述べた所に着いた。」<sup>23</sup>

23) Аще бы имъ мощно, то единемъ бы часомъ привлекли его, врага, сюдѣ. (*Пов. о Рос. цар. с. 195*)

「もし彼等にできることならば、彼等は一刻のうちに、かの敵をここへ連れて来たであらうに。」<sup>24</sup>

24) Да близъ же Египта Черное море; ѣздить на верблюдахъ единымъ днемъ и ночью до него. (*Пут. Гозары с. 118*)

「ところでエジプトから紅海は近い。人は駱駝でそこまで一日一夜のうちに行く。」<sup>25</sup>

<sup>23</sup> Сравнительно-исторический синтаксис ..., р. 255.

<sup>24</sup> *ibid.*

<sup>25</sup> *ibid.*



- 25) святѡполкъ же прѣде нѡуѣю вышєгородѣ. (ПВЛ л.45об. 7018 (1510))

「スヴァトポルクは夜にヴィシェゴロドに到着した。」<sup>26</sup>

例文 22)~24) は行為によって占有される時間をあらわすとされるものである。これと例 25) とを比較すれば、その意義の相違は文脈に依存する解釈の問題に過ぎぬことが、明らかとなろう。

§15 次のものは、状態の質を有する動詞に伴われる造格の例である。

- 26) и пыхомъ не мало дѣньми и минухомъ островъ лимность и приидомъ во островъ хіосъ, и пристахомъ тутъ, и быхомъ немало дѣньми. (Пут. Зосимы с. 63)

「かくして我々は少なからぬ日数を航海し、レムノス島を過ぎてキオス島に着いた。我々はそこで碇泊し、少なからぬ日数を過した。」<sup>27</sup>

運動の動詞、空間的移動の動詞以外の過程の質を有するものと共に用いられている例としては、たとえば、

- 27) ты днемъ и ночью мучишися. (Пис. Курб. с. 140)

「汝は昼も夜も苦しんでいるのではないか。」<sup>28</sup>

§16 空間をあらわす名詞の造格を伴う動詞も、そのほとんどが運動の動詞である。この種の造格には、行為が経過する空間をあらわすものと、線條的な運動の行なわれる空間をあらわす場合があるとされる<sup>29</sup>。

前者の例としてはたとえば、

- 28) абіе скоро прїиде въ ложницу цесарскую, затворенными дверьми, яко Христось нашъ ко ученикомъ. (Пис. Курб. с. 149)

「突然急に彼は、閉された扉を通して皇帝の寝所に入った。あたかも我等のキリストが弟子達の許に行くように。」<sup>30</sup>

- 29) и тою-де щелію Господь нашъ Іисусъ Христось во адъ сходилъ на воскресеніе мертвыхъ. (Пут. Гогоары. с. 113)

<sup>26</sup> *ibid.*

<sup>27</sup> *ibid.*

<sup>28</sup> *Сравнительно-исторический синтаксис ...*, p. 256.

<sup>29</sup> *op. cit.*, p. 257; Т. П. Ломтев, *Очерки по историческому синтаксису русского языка*, М. 1956, p. 239 & seq.

<sup>30</sup> *Сравнительно-исторический синтаксис ...*, p. 257.

「そしてまさにその裂目を通して、我等の主イエス・キリストは、死者のよみがえりのために、地獄へ下りて行って来られたのである。」<sup>31</sup>

後者の例としてはたとえば、

- 30) А половцы неготовыми дорогами побѣгоша къ Дону великому. (Сл. о П. Из. с. 9)

「ところでポロフツィは、道なき道を、大いなるドンを目指して、遁走した。」

- 31) И шли есмь моремъ до Мошката 10 дни. (Хожд. Аф. Никит.)

「そこで我々は、モシカトまで海路を十日で行った。」

§17 過程の質を有しているが、通常運動の動詞とは扱われていない動詞の用いられている例は、たとえば、

- 32) аще ли бѣдѣаше нѣжное ѡрѣдѣе то ѡконцемъ малѣи бесѣдова-  
ше. (ПВЛ л.62об. 6082(1074))

「必要な用事のあるときには、小さな窓を通して彼は会話を交したものであった。」

- 33) и про то окно сказахъ намъ патріархъ Іерусалимскій Софроній, что тѣмъ окномъ, по Господню повелѣнію, взято тѣло Богородицы из гроба, идѣже Богъ вѣсть. (Пут. моск. купцов с. 147)

「しかしてその窓について、エルサレムの大主教ソフロニウスが、我々にかつて語った。その窓を通して、主の命により、聖母の遺体がひつぎより盗られたと。それがどこにあるかは誰も知らないのである。」<sup>32</sup>

§18 これまで述べて来たものの外、造格の用法としてしばしば言及されるものに「性質と関係の造格」творительный качества и отношения、あるいは単に「関係の造格」と呼ばれているものがある。これはむしろ「限定の造格」Instrumentalis limitationis とでも言うべきものであるが、この種の用例を検討すれば、この用法の基底にも、「はたらしき」を指示するという機能が存しているという感じを受ける。たとえば、

- 34) азъ разоумомъ растлененен бых, и скотен умомъ и проразумеваниемъ. (Моск. гр. 1572)

「わたくしは思慮において混乱しており、知恵と悟りににおいて家畜のようなものでありました。」

<sup>31</sup> *ibid.*

<sup>32</sup> *Сравнительно-исторический синтаксис ...*, pp. 257–258.

- 35) Приамось тѣломъ высокъ, чистъ бровма. Екторъ силенъ крѣ-  
постию. (*Пов. о взят. Трои*)

「プリアモスは身体が（背が）高く、双の眼が涼しい。ヘクトルは力が強い。」

したがってこれが「～において」、「～に関して」というような、限定の意義をもつとされるのは、やはり文脈による「はたらき」の一つの解釈であると言うことができる。

§19 以上の外、古代ロシア語では極めて稀であるが、いわゆる「随伴の造格」творительный сопровождения, instrumentalis comitativus と呼ばれるものがある。

- 36) А обезьяны то тѣ живутъ по лесу, да у нихъ есть князь обезьянский, да ходить ратью своею, да кто ихъ заимаетъ, и они ся жалуютъ князю своему, и онъ посылаетъ на того свою рать. (*Хож. Аф. Никитъ*)  
「ところでこれらの猿は森に棲み、彼等の中には猿の王がいる。彼は自分の手勢と共に歩きまわっている。誰かが彼等を捕えると、彼等は己れの王に訴える。そこで王はその者に対して己れの手勢を差向けるのである。」

- 37) БѢ ЖЕ МЪСТНСЛАВЪ· ДЕБЕЛЪ ТѢЛОМЪ· УЕРМЕНЬ ЛИЦЕ· ВЕЛИКЫМА ОУН-  
МА. (*ПВЛ* л.51 6544(1036))

「ところでムスチスラフは身体が肥っていて、赤ら顔で、大きな眼をしていた。」

§20 造格の随伴の意義は広く印欧諸語にみとめられ、これが造格の原義であるとする観方もある。たしかに随伴の意義から道具乃至手段の意義を派生することは論理的に充分可能である。しかし一方随伴の意義から、たとえば行為者の意義、あるいは原因、様態の意義を導くことはむずかしいと思われる。

これに対して「はたらき」の意義は、既に述べたように、道具、手段の意義を派生することができると考えられるから、問題となるのは、「はたらき」の意義と「随伴」の意義との関係である。

結論を言えば、「随伴」の意義から「はたらき」の意義を導くことはむずかしいが、逆は可能である。たとえば例 36) の場合、ратью своею を「己れの手勢の力をもって」と解することは可能であり、「はたらき」を示すものと考えることができる。事実 итти ратью は、年代記においてしばしば用いられ、「戦いに行く」ことを意味している。ヴァイアンが随伴の造格を様態の造格から派生したものと考えているのも、このことと関連している。

例 37) はラヴレンチイ本では чермень лицомъ となっており、その前にある дебель тѣломъ と共に限定の造格であった疑いが濃厚である。また великыма очима は先行の造格のいわゆる attraction による形かもしれず、また絶対与格という可能性もある。

その他の例も仔細に吟味してみれば、限定の造格の疑いのあるものが多く、かつ用例が限られていることもあって、別個に随伴の造格というカテゴリーをたてる必要があるか否かについては、更に検討の要がある。

以上の考察から、本稿の冒頭に掲げた造格の機能に関する仮説は、概ね妥当であるといえることができる。

### III. 叙述の造格

#### 不完全他動詞

§21 古代ロシア語においては、いわゆる第二主格または第二対格をとる「不完全動詞」の存在が知られていた。このうち第二対格をとるものには、準他動詞<sup>33</sup>に属する *verba nominandi* の外、*verba faciendi*, *verba capiendi* などの他動詞および状態動詞の *verba habendi* がある。

これらの動詞の意義構造は、それぞれ次のような形であらわすことができる<sup>34</sup>。

$$V(tr.incom.): [dS_x, dS_y, Q, (S_y \rightarrow Q) \cdot K]$$

$$V(qtr.incom.): [dS_x, dS_y, Q, (S_y = Q) \cdot K]$$

ここで  $S_x, S_y$  は発話の状況の変化の担い手である対象  $x$  と  $y$  の状態をあらわし、 $dS_x, dS_y$  はその状態の、行為の認定に要する時間  $\Delta_t$  における変化をあらわしている。 $Q$  はある概念または状態、 $(S_y \rightarrow Q), (S_y = Q)$  は  $S_y$  が  $Q$  に変化することおよび  $Q$  に等しいことをあらわす。 $K$  は行為の認定に要する附加的條件の集合であり、 $(S_y \rightarrow Q) \cdot K$  は  $(S_y \rightarrow Q)$  が  $K$  の元であることを示している。

§22 *verba faciendi* の例はたとえば、

- 38) ...и поставиша архієписпа новогородоу феоктиста. (Новг. 1 Л. л. 152об. 6808(1300))

「しかし、人々はノヴゴロドの大主教として、フェオクチストを任命した。」

ここで  $x$  = 「人々」、 $y$  = 「フェオクチスト」、 $Q$  = 「大主教」である。この種の動詞においては、少なくとも対象  $y$  の状態を  $Q$  にすること、換言すれば  $y$  を  $Q$  の外延に帰せしめること、即ち  $(S_y \rightarrow Q)$  が附加的條件の集合に含まれていると考えるのである。

*verba nominandi* の例としては、

- 39) жрэхѣ нмѣ, нарнѹюще ѡ б[ог]ѣ. (ПВЛ л.25 6488(980))

「人々はそれらを神と呼び、それらをまつていた。」

<sup>33</sup> 準他動詞については、拙稿「準他動詞について」『ロシア語ロシア文学研究』第8号(1976)。

<sup>34</sup> 詳しくは、拙稿「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第23集(1977)。

ここで  $x$  = 「人々」、 $y$  = 「それら」、 $Q$  = 「神」である。

§23 *verba habendi* は状態動詞であるから準他動詞に属すると考えられるが、これが不完全動詞になるとすれば、その意義構造は次のようなものとなろう<sup>35</sup>。

$$V(qtr./stat.incom.) : [S_x, S_y, Q, (S_y = Q) \cdot ((R(S_x(t_0), S_y(t_0))) \\ = R(S_x(t_1), S_y(t_1))) \cdot K]$$

ここで  $S_x(t_0)$  は時点  $t_0$  における  $S_x$  の状態をあらわし、 $R(S_x(t_0), S_y(t_0))$  は時点  $t_0$  における  $S_x$  と  $S_y$  のあいだにある関係  $R$  が成立っていることをあらわす。たとえば、

40) КЛАНАЕМСА ТОВѢ· Н ХОЦѢМЪ ТА НМѢТИ СОВѢ ОУЦА(Н) НГОУМЕНА.  
(*Ипат. Л. л.220 6690(1182)*)

「我等は汝に礼をなし、汝を我等が父とし僧院長とせむと(僧院長として持たむと)欲する。」

ここで  $x$  = 「我等」、 $y$  = 「汝」、 $Q$  = 「父」 = 「僧院長」である。また  $t_0$  における  $x$  と  $y$  の状態の関係が、 $t_1$  における関係と同じであることを含んでいる。

§24 これらの動詞に伴われる第二対格は、やがて造格に置換されるが、その過程は名詞の場合、18 世紀迄に完了する。

41) Н ѠПѢСТН Ю НАРЕКЪ Ю ДЪЩЕРЬЮ СОВѢ· (*ПВЛ л.17об. 6463(955)*)  
「彼は彼女を己が娘と呼んで、彼女を放免した。」

42) ТОГО ЖЕ ЛѢТА ПОСТАВНША СЕМЕОНА ЕПѢОМЪ ВОЛОДНМЕРЮ.  
(*Ипат. Л. л.107 6631(1123)*)  
「同じ年、人々はセメオンをヴォロヂメリの主教に任じた。」

43) СЛЫШЮ ЖЕ СЕ, ИКО СЕСТРѢ НМАТА ДВОЮ· (*ПВЛ л.37об. 6496(988)*)  
「私が汝等二人が、娘の(嫁入り前の)をもっていると聞いている。」

§25 たとえば *поя ю собѣ жену* 「彼は彼女を自分に妻として娶った」というとき、*ю* 「彼女・対格」は対象  $y$  にあたり、具体的な対象をあらわしている。これに対し *жену* 「妻・対格」は、具体的な対象を示しているのではなく、妻という概念をあらわしているに過ぎないと考えられる。

<sup>35</sup> 状態動詞の意義構造については、拙稿「状態動詞について」『古代ロシア研究』第12号(1978), pp. 57-62.

このように普通名詞が具体的な対象を指示せず、単なる概念をあらわしているにもかかわらず、具体的な対象を指示する第一対格と同じ形式をもっているとすれば、これはやがて集団のもつ言語感覚に違和感を生ぜしめる原因となると想像される。第一対格のあらわすものと第二対格のあらわすものが、その抽象度において異っているからである。

第二対格が造格によって置換されたのは、このような違和感の然らしむところであったと思われる。しかしこの場合、なぜこの違和感を除去するのに、造格が用いられたか、が更に問題となろう。

もし対象  $z$  を指示する名詞をもって概念  $Q$  を表わすことに、最初の無理があったとすれば、 $z$  によって  $Q$  をあらわす工夫が必要となる筈である。造格がこのための手段であったとすれば、この工夫が造格のもつ「はたらき」という機能と、どう関係しているのか、問題となって来る。

§26 多少思弁的に  $z$  と  $Q$  との関係を考えれば、 $z$  は  $Q$  の一つの元であり、 $z$  をもって  $Q$  が代表される、ということができる。

この関係を仮に  $Q(z)$  とあらわすことにする。これは観方によれば一つの関数であり、働きであると考えることができる。集合  $\{z_i | i \in N\}$  ( $N$  は自然数) の各元から集合  $\{Q_j | j \in N\}$  の各元への写像を考えればよいからである<sup>36</sup>。

そうなれば、これは造格の定義と一致する。すなわち対象  $z$  を指示する名詞を造格にすることによって  $Q(z)$  が得られると解するのである。

そうとすれば現代ロシア語におけるこの種の動詞の意義構造は、次のように記述することができる。

$$V(tr.incom.) : [dS_x, dS_y, Q(z), (S_y \rightarrow Q(z)) \cdot K]$$

$$*V(qtr.incom.) : [dS_x, S_y, Q(z), (S_y = Q(z)) \cdot K]$$

状態をあらわす他動詞であって、造格補語をとる例は、現代ロシア語においては認められないようであるが、これについては更に検討の要がある。

### 不完全自動詞

§27 自動詞の場合も、他動詞および準他動詞の場合と同様に考えることができる。

不完全自動詞は第二主格を伴うとき、次のような意義構造の記述をもっていた。

$$V(itr.incom.) : [dS_x, P, (S_x \rightarrow P) \cdot K]$$

これに前節の結果を適用し、 $P$  を  $P(y)$  によって置き換えれば、次のようになる。

<sup>36</sup>拙稿 Remarks on the Meaning of Russian Verbs, *Japanese Slavic and East European Studies*, vol.1, 1980, p. 9. なおノヴォトニーはこの写像を canonical mapping と呼んでいる。cf. M. Novotný, Some Algebraic Concepts of Mathematical Linguistics, *Prague Studies in Mathematical Linguistics*, No.1, Prague 1966, p. 130.

$$V_i(itr.incom.): [dS_x, P(y), (S_x = P(y)) \cdot K]$$

ここで  $V_i$  は造格補語を伴う動詞を意味している。

この種の動詞の典型的なものは、verba fiendi である。たとえば、

- 44) **И СЪГНА ОТУЦА СЪ ПРЕСТОЛА И САМЪ ЦЕСАРЕМЪ СТА.** (Ноев. 1 Л. л.66об. 6712(1204))

「彼は父を玉座から追い落とし、みずから皇帝となった。」

状態自動詞は現代ロシア語においても、しばしば造格補語を伴う。従ってこの種の状態動詞の意義は、次のような構造記述をもつと考えられる。

$$V_i(itr.stat.incom.): [S_x, P(y), (S_x(t_0) = S_x(t_1)) \cdot (S_x = P(y)) \cdot K] = [S_x, P(y), (S_x(t_0) = S_x(t_1) = P(y)) \cdot K]$$

- 45) **И ѿ ярополка жена грѣкнии бѣ и баше была уерницею.** (Ипат. Л. л.30 6485(977))

「ヤロ波尔クの妻はギリシア人であり、以前には尼僧であつた。」

第二主格、第二対格の場合には、両者の格を区別する為に記号  $P$  および  $Q$  を用いたが、名詞と概念との関係という観点からすれば、両者を特に区別せねばならぬ理由はない。これを  $F(x)$ ,  $F(y)$  のようにあらわすとすれば、名詞の造格を補語とする不完全動詞の意義は、次のように統一的に記述することができる。

$$\begin{aligned} V_i(tr.incom.): [dS_x, dS_y, F(z), (S_y \rightarrow F(z)) \cdot K] \\ V_i(qtr.incom.): [dS_x, S_y, F(z), (S_y = F(z)) \cdot K] \\ V_i(itr.incom.): [dS_x, F(y), (S_x \rightarrow F(y)) \cdot K] \\ V_i(itr.stat.incom.): [S_x, F(y), (S_x(t_0) = S_x(t_1) = F(y)) \cdot K] \end{aligned}$$

## 連 辞

§28 多くの語において連辞 copula は存在動詞から転用される。存在をあらわす動詞の意義は、一般に次のようなものと考えられる。

$$V(esse): [S_x, L, (S_x \subseteq L) \cdot (S_x(t_0) = S_x(t_1)) \cdot K]$$

ここで  $L$  は一定の場所を、また  $S_x \subseteq L$  は対象  $x$  の状態が  $L$  に含まれていることを、すなわち対象  $x$  がある  $L$  の一部としてこれに所属していること、をそれぞれ表わしている。もし  $L$  が普遍的な世界の全体  $U$  に等しい場合は、 $L$  の表示は必要でない<sup>37</sup>。

もしこれが連辞に転化したとすれば、これは  $K=\phi$  として（日本語では「いる」と「ある」の区別にみられるように  $K$  は空ではない）、 $L$  がある概念  $P$  によって置換されたものとみられる。すなわち、

<sup>37</sup> 詳しくは拙稿「存在文と否定存在文について」『言語研究』第75号 S54 (1979), pp. 1-30.

$$V(cop.) : [S_x, P, (S_x \subseteq P) \cdot (S_x(t_0) = S_x(t_1))]$$

これに前々節の結果を適用すれば、次のようになる。

$$V_i(cop.) : [S_x, F(y), (S_x \subseteq F(y)) \cdot (S_x(t_0) = S_x(t_1)) \cdot K]$$

§29 古代ロシア語においては、連辞が造格を補語とする場合は稀であった。しかし造格補語が使用される場合の連辞 быть の時称は、現代語におけると同じく、現在以外である。特に過去完了の場合に比較的多いのが、注目される。

46) понеже была бѣ мати его черницею. (Ник. Л. IX-48 6488(980))

「なぜなら彼の母が、かつて尼僧だったからである。」

47) бѣ бо ѿ ярополка жена гркннѣ, бѹше была прежде черницею.

(Новг. 1 Л. М.и. л.42 6485(977))

「ヤロポルクにはギリシア人の妻がいたが、彼女は以前には尼僧であった。」

その他の時称の例としては、たとえば、

48) да не бѣдет новын търгъ новгородомъ, ни новгородъ тържкомъ. (Новг. 1 Л. л.83 6724(1216))

「ノヴィ・トルグがノヴゴロドにならず、またノヴゴロドがトルジョク(ノヴィ・トルグ)にならぬように。」

49) изъяславъ стославъ и всеволодъ высадиша стромъ своего сѣдн-слава не порѣба ... и бѣ черницею. (ПВЛ л.55 6567(1059))

「イジャスラフとフセヴォロドは、己が伯父スチスラフを牢から出し…そして彼は僧となった。」

以上から古代語における造格補語の使用は、未だ萌芽的であるとは言え、既に現代語の使用の傾向と軌を一にしていることが知られる。

§30 現代ロシア語においても連辞 быть の造格補語の使用は、現在時称の場合には制限されており、比較的自由なのは、現在以外の諸時称においてである。

過去形の場合、造格補語は、1)「過去において恒常的に存在する徴條」、2)「過去の職業、仕事の種類、人物の状態」、をそれぞれあらわすとされている。たとえば、

50) Дом, мимо которого бежала Аночка, был городской школой. (Фед.)

「アーノチカが走り過ぎた家は町の学校だった。」



- 51) Бопре в отечестве своем был паримахером, потом в Пруссии солдатом.  
(Пушк.)

「ボブレは国では理髪師だったが、その後プロシアで兵隊になった。」

- 52) Был я в то время студентом в провинциальном университете. (Л.  
Толст.)

「私は当時田舎の大学の学生でした。」

§31 これに対して主格補語が用いられているのは、1)「過去において恒常的に存在する徴條の一般的意義」をあらわす場合、2) человек、женщина のような一般的な意味を持つ語で、叙述の重点がこれに附加された修飾語にある場合、などである。この外 19 世紀には「過去における一時的な徴條」をあらわす場合にも、主格が用いられたという。

- 53) Германи был сын обрусевшего немца. (Пушк.)

「ゲルマンは、ロシアに帰化したドイツ人の息子だった。」

- 54) Она была женщина добрейшая ... (Тург.)

「彼女はとても善良な女性だった。」

- 55) Слезы его были самолюбивые слезы. (Тург.)

「彼の涙は自尊心ゆえの涙だった。」

- 56) Конечно, мы были приятели, ну да что приятели в нынешнем веке.  
(Лерм.)

「もちろん我々は友人だった。しかし今時の友人などというものは！」

§32 以上の説明によれば、「過去において恒常的に存在する徴條」をあらわす場合が、主格補語と造格補語とに共通している。また主格補語について述べられている「徴條の一般的意義」という語の意味も、甚だ曖昧である。

例文を観察すれば、主語と補語の間に過去に存在していた関係が、その後変化する可能性をもたない場合、主格補語が用いられるとすることができる。たとえば例 53) のゲルマンがロシアに帰化したドイツ人の息子であるという関係は、それ自身過去のものであるが、時の経過に従って変化することはない。

19 世紀に主格補語に立ち、一時的な性質や状態を指すとされているものについても、同様である。たとえば、

- 57) Он мне страшно обрадовался и стал расспрашивать об ужасных происшествиях, коим я был свидетель. (Пушк.)

「彼はすごく喜んで私を迎え、私が目撃者となった恐ろしい事件について訊ねはじめた。」

この場合にも「私」が「事件の目撃者」であったという事実関係は、変るような性質のものではない。

§33 未来形の場合には造格を用いるのが通則である。たとえば、

58) Супружество нам будет мукой. Я, сколько ни любил бы вас, Привыкнув разлюблю тотчас ... (Пушк.)

「我々にとって夫婦生活は苦しみになるでしょう。私がどれほど貴女を愛していたにしても、慣れるとすぐに愛は醒めるものです。」

これに対し主格補語が用いられることは 19 世紀においても極めて稀であった。管見の限りでは、主格補語が用いられるのは、具体的な対象が未来においてある関係をもつことを、言主が確信している場合に限られる。

59) “Неразумная голова, — говорил ему Тарас — Терпи, казак, — атаман будешь” (Гог.)

「ばかな奴だ — とタラスは彼に言った — 我慢しろ、そうしたら首領になれるぞ。」

60) О милый мой, / Ты будешь царь земли родной! (Пушк.)

「おお、愛する人よ。あなたは故国の主となるでしょう。」

命令法、接続法に主格補語が用いられるのは極めて稀であって、殆んどの場合造格に立つ。

§34 未来・命令法、接続法の諸形に専ら造格補語が用いられるとすれば、これらの時称又は法の有する機能が、造格補語の使用を容易ならしめていると考えなくてはならない。その理由は恐らくは、быть がこれらの諸形に立つ時、*verba fiendi* に近い意義を獲得するという点に求めるべきであろう。быть の語根 \*bhewə- も、かつては「～になる」という意味をもっていた。

このように *verba fiendi* に近い連辞の意義を  $Vi'(cop.)$  とすれば

$$Vi'(cop.) : [dS_x, F(y), (S_x \rightarrow F(y))]$$

過去形で造格補語をとるものの意義を語彙化して  $Vi''(cop.)$  とすれば、その構造記述は次のようなものとなる。

$$Vi''(cop.) : [dS_x, F(y), (S_x(t_0) = F(y) \neq S_x(t_1))]$$

ここで  $\neq S_x(t_1)$  は、明示的でなく、単に合意されるにとどまっているから、これを除いて  $V'_i$  と  $V''_i$  との構造記述に平行性をもたせれば、次のようになる。

$$V'_i(\text{cop.}) : [dS_x, F(y), (S_x(t_1) = F(y))]$$

$$V''_i(\text{cop.}) : [dS_x, F(y), (S_x(t_0) = F(y))]$$

法及び特に時称の影響の及び方が、かくして明瞭になる。両者を一つにまとめれば、

$$V_i(\text{cop.}) : [dS_x, F(y), ((S_x(t_0) = F(y)) \vee (S_x(t_1) = F(y)))]$$

これに対し主格補語をとる場合 ( $V_n$ ) は、 $K=\phi$ として、次のようになる。

$$V_n(\text{cop.}) : [S_x, P, (S_x \subseteq P) \cdot (S_x(t_0) = S_x(t_1))]$$

これはまた次のようにも書ける。

$$V_n(\text{cop.}) : [S_x, P, ((S_x(t_0) = P) \wedge (S_x(t_1) = P))]$$

§35 以上述べたことから、現在形の場合に造格補語が使用しにくいことは、明らかである。現在の場合、認識に際して対象と対象の有する機能とを分離することが、一般にはむずかしいからである。現在形に使用される造格補語が、「活動の種類、職業、任務、状態」などを、明確な形であらわす場合に原則として限られているのも、この為である。

- 61) А тетушка? Все дебушкой. Минервой? Все **фрейлиной** Екатерины Первой? (Гриб.)

「ところで伯母さんは。相変らず嫁にも行かず、おぼこなのかい。相も変らずエカテリーナー一世の女官なのかい。」

この種の用法においては、対象と対象の有する機能との分離を容易ならしめる為に、時間あるいは空間の限定を伴う場合が多い。

- 62) Я старостою здесь над водяным народом. (Крыл.)

「私はここでは、水中に棲むうからの長老である。」

- 63) У меня мать здесь учительницей. (Гор.)

「私の母はここで教師をしています。」

- 64) Ведь он теперь у нее великим визирем. (Тур.)

「だって彼はいま、彼女にとって宰相なんだから。」

- 65) Я снова посудником на пароходе «Пермь». (Гор.)

「私は再び汽船ペルミ号の皿洗いをしています。」

§36 この外主語と同じ語の造格が補語となって、強調をあらわすことがある。

66) Дело делом, а любовь любовью. (Казак.)

「仕事は仕事、恋は恋さ。」

これも形式的には「仕事は仕事の集合(又は概念)に属する」等として解釈できる。

また вина, порука, причина は現在時であっても、補語として立つとき造格になるといわれる。実例についてみれば、これは一般に人を主語とし、人の属性を指示するものであるから、単純に  $S_x \subseteq P$  又は  $S_x = P$  と置く訳にはいかない。造格が使用される所以である。

67) Ах! этот человек всегда причиной мне ужасного расстройства!  
(Гриб.)

「ああ、この人間はいつも私にとって、恐ろしい混乱の原因である。」

以上から明らかなように、連辞としての быть は  $V_n(cop.)$  と  $V_i(cop.)$  の二つの意義構造を併せ有しており、統辞論のレベルにおける条件に応じて、何れか発現しやすい方の構造をとると考えられる。

おわりに

この論文は1979年6月に脱稿したものである。時を得ないままに筐底に蔵していたが、ここで得た結論は、一部 Remarks on the Meaning of Russian Verbs. に用いている。